

ハイカが導く縄文社会

板屋Ⅲ遺跡・下山遺跡・上ノ谷遺跡（ともに飯南町）1994～2020年調査

今福拓哉

三瓶山の膝元である大田市や飯南町の神戸川流域で発掘調査を実施する際、発掘調査員は「ハイカ」と呼ばれる土層に注意します。ハイカとは、三瓶山の噴火に伴い降下・堆積した火山灰のことです。今は静かな姿を見せている三瓶山は、縄文時代に3回の活動期があり、これに対応するように3層のハイカ（第1～第3ハイカ）が確認できています。これらのハイカは年代が判明しており、第1ハイカが縄文時代後期前葉（約4,000年前）、第2ハイカが縄文時代前期末（約5,500年前）、第3ハイカが縄文時代早期（約10,000年前）頃に噴出しています。これらのハイカとハイカの間には、遺物や遺構が確認できる黒色土層が堆積していますが、土層は基本的に古いものから順番に堆積するため、ハイカに挟まれた黒色土層の年代の位置付けが可能となり、遺物や遺構の時期を明らかにすることができます。これがハイカに注意する理由となります。

さて、ハイカは、地上に降下・堆積すると環境にも影響を与え、特に降灰量が多い地域では壊滅的な被害を受けたと考えられます。飯南町志津見地域の板屋Ⅲ遺跡や下山遺跡などの発掘調査では、第2ハイカが60cmの厚さで堆積しており、縄文人が活動できない環境であったと推測できます。出土遺物からもその状況がうかがえ、下山遺跡などで第2ハイカ降下直前に使用されていた土器が降下後には確認できなくなっています。

これ対し、三瓶山からやや距離の離れた地域では状況が異なります。というのは、私が発掘調査を担当した飯南町下来島の上ノ谷遺跡では、志津見地域同様に火山灰が堆積していました。しかし、志津見地域での発掘成果と異なり、第2ハイカ降下直前に使用された土器

が第2ハイカの上層で出土し、降灰後にも縄文人が活動していることがわかりました。調査当初は「ハイカ層を誤認したのかも」と焦りましたが、ハイカや黒色土層の堆積状況を丁寧に観察し、誤認していないことを改めて確認しました。

この現象をどのように理解すべきか思案しましたが、やはりハイカの観察をきっかけに一つの推測へとたどり着きました。それは、志津見地域と比較すると、上ノ谷遺跡の第2ハイカの厚さは約20cmと薄く、火山灰の降下の向きや量の違いから環境への影響は限定的であり、短期間で活動可能な状況となったというものです。つまり、上ノ谷遺跡では噴火の影響から逃れた縄文人が活動していたと考えられ、場合によっては、三瓶山周辺の縄文人が来島地域へ移動してきた可能性もあります。

以上のようにハイカは、我々調査員にとって貴重な道標となり、地層の年代や縄文時代の自然環境、社会環境など、多くのことを考えさせてくれるのです。

(島根県文化財課 主任主事)



板屋川遺跡（右）と上ノ谷遺跡（左）の土層堆積状況（白色土層がハイカ）



第2ハイカ降下直前に使用された土器（左：下山遺跡）と第2ハイカ降下後に使用された土器（右：上ノ谷遺跡）